【 職員を守る、園を守る１】男性職員を守るために

★【保育 2:触れる、抱っこをする】も参照

疑われるだけでも、人生を壊しかねない

今の時代、他人を陥（おとしい）れよう、あるいは、いやがらせをしようという人は少なくありません。悪意はなくとも、見たこと、聞いた話の勘違い、歪曲なら、誰もがします。そして、目の前の事実をどう解釈、評価するかさえ、人それぞれ大きく異なります。

この点において、未就学児施設で起こる深刻な問題のひとつが、（男性職員による）園児への性暴力や盗撮とその疑いです。疑いだけでも園に対する信頼は揺らぎ、その職員の仕事と人生を壊しかねません。「疑われない」ための積極的な取り組みが必要です。

「李下（りか）に冠を正さず、瓜田（かでん）に履（くつ）を納（い）れず」は、「疑われるような行動は慎む」という意味。今は、これを予防的に行うことが大切。

子どもの脳は「本当」と「嘘」を区別できず、誘導に弱い

未就学児の脳は、記憶する仕組みをつくっている途上ですから、事実と物語の区別があいまいです。「こうだったんでしょう？」「〇〇先生が〜したんだね」といった、圧力の強い、誘導的な質問に弱く、「嘘の記憶」を持ってしまうこともあります。

自分が言ったことで、周囲のおとなにどんな影響が及ぶかも、もちろん理解していません。

★『子ども育ての本』p.168〜169

誘導などを用いて、おとなの記憶を変えることもできます。事実と異なる記憶を植えつけることも可能です。　★同左参照

「目の前で子どもが転んだできごと」ひとつでも、見ていた複数の保育者の報告は違います。人間の記憶は、ビデオカメラで撮影するようなものではありません。　★『保育現場の「深刻事故」対応ハンドブック』p.18〜

自分の行動や言動が、おとなだけでなく、子どもからもどう見えるかを意識するのは、保育者の仕事の基礎

→ 今後のシートに続く

オムツ替えや下着の着替えを男性保育士がしないのは、男性差別か？

「自分の子ども（性別にかかわらず）のオムツ替えや着替えは、女性保育者にしてほしい」と保護者が言うことは珍しくありません。活動の中でも、たとえば、男性保育者の脚にまたがった子どもを電車のように揺らす遊びも、保護者と園の間で頻繁に問題になります。

「考えすぎ」「男性差別」と言うのは簡単ですが、男性保育者による性暴力は実際に起きており、「やめてほしい」という保護者の感情を変えることはできません。「男性保育士がオムツ替えも着替えもするべき。それが平等」と主張すること自体が、保護者の疑念や不快感を引き起こす可能性もあります。男性保育士の業務内容を保護者に伝えておくことも大切でしょう。

女性の保育者は、分業によって同僚の男性保育者を守ることができます。

子どもと職員を守る環境をつくる

▶女性職員も、金銭目的等で盗撮をするリスクがある点に留意。

▶音声も記録できる見守りカメラを置く。単体で動く、家庭用の安価なものでよい。インターネットには初期設定時以外つながず、記録やチェックはSDカードで行う。または、イントラネットでつなぐ（動画情報が漏洩するのを防ぐため）。

▶職員は自分を守るため、カメラがない場所や明らかな死角で、子ども１人〜数人と過ごさないようにする。

▶保育中は個人のスマホを使わない（雇用者がスマホを用意する）

▶職場のスマホは、クラウド上でデータを保存する。

▶見守りカメラは、「自分の子どもが他の子どもにいじめられている」「保育士が暴言を吐いた」など、事実に反する指摘を受けた場合にも役立つ。

たとえば、トイレの入り口も写る場所に見守りカメラを設置しておくと、「うちの子どもが先生にトイレで…」と言われた時、「その保育士が子どもとトイレに行った事実はありません」と言える。

製作：掛札逸美、青柳淳子、小倉北ふれあい保育所。イラストはGeminiによる。未就学児施設が用いる以外の利用は一切お断りします。このシートをコピーする時は、必ずこの文言もコピーしてください。